




NIGHTMARE  
WEAVER

ADULT ONLY




「やっほ～社長見てるっ？心配かけてごめんね♡  
あたしは今あ…ご主人様のところで肉奴隷してま～す♡  
これ見て…フフフ♡ようやく妊娠したって判定でたんだあ♡  
これであたしは完全な奴隷になったってことで  
こうしてビデオレターを送らせてもらったの♡

ご主人様は年下のモデルの男の子なんだけど  
大手芸能事務所社長の息子さんで  
すごい権力持ってるの♡  
あたしがもともとご主人様を遊びに  
誘ったんだけど逆にホテルで  
ご主人様のチンポに調教されちゃって  
今こんな感じ♡

なんで社長にこんなビデオメール  
送ったかって言うと…  
実はご主人様が社長のごと  
前から気に入ってたんだって♡  
だから社長は一緒に送った住所まで  
指定された時間に1人で来てね♡

来ないとあたしのご主人様の命令で  
いろんな事務所のおじさんと寝た写真とか映像を  
バラまっちゃうから絶対来てよね  
誰かにこのこと言いふらしてもダメだよ？

あたしは別にどうなってもいいんだけど  
社長の事務所のモデルの子全員が  
こんなことしてるって思われたら事務所も  
みんなの人生もメチャクチャになっちゃうよね？  
…社長なんだからみんなを守ってあげてよね  
フフフ♡」



「あなたは…そう…  
若手モデルの子が業界の女性を  
手箒めにして枕営業に使ってるっていう  
噂は本当だったのね」  
「ボクを最初に誘ってきたのは  
きららお姉ちゃんの方なんだけどなあ  
まあボクも仕事中にちよつと  
甘えたりしてみたけど」  
「…きらはどこ？」  
「お姉ちゃんは『仕事中』だよ  
ボクが依頼したね」  
「…うちのモデルを返してもらおうわ」  
「そんな簡単に事が済むと思ってる？  
思っていないよねえ？」  
「……」

「お姉ちゃんがよくパフって  
犬の話をしててね…  
ボクもペットが  
欲しくなったんだ」  
「……」  
「それで飼うなら若くして  
高い地位に上り詰めた  
気位が高さがあって  
それでいて適度に男を知ってる  
身体の牝犬がいいなって  
現役モデルみたいな生娘には  
もう飽きちゃってさ」

「…私にどうしろと言うの」  
「まずは裸になってよ  
ペットに服着せたりする趣味は  
ないからさ」  
「……わかったわ…」  
「ハハハツ…いいねー  
それじゃ恥ずかしいところが  
全部丸出しになるように  
ポーズとって見せて  
かに股で…ほら腋も見せてよ」  
「…こう…かしら…」  
「やっぱり普段相手にしてる子とは  
全然違うなあ…社長も歳を  
考えるとすごい若いと思うんだけど  
このだらしない乳輪とか…  
フフツ…処理の甘い腋とか  
最高だよな」  
「……」  
「じゃあ服は捨てちゃうね  
もう社長にはいらぬものだから  
ボクに着いてきて  
これから社長が暮らす部屋に  
案内するよ」

「ほら入ってそこに座って」

「……」

「じゃあ首輪と腕輪をつけるから大人しくしててね」

「腕輪まで…」

私を動けなくしてどうするつもり？」

「別にどうするつもりもないよ」

ただほんとの犬じゃないからさ腕もこうしておかないと逃げ出しちゃうかもしれないでしょ」

「……」

「どのくらいこの状態が続くのか？」

って思ったでしょう」

「……ええ…」

「どのくらいだろうねー」

まあボクが飽きるまでかな

子供が飼うペットなんてそんなもんでしょ」

「………トイレはどこへすればいいの」

「その辺にすれば？」

ペットが定期的に病気にならないように

掃除はしに来るからさ」

「………そう…わかったわ」

「まあ気持ちはわかるよ」

だから食事はなるべく少なめにしてあげるね


明後日くらいに最初の食事を持っていくよ」

「あ…明後日……！？」

「餌でペットを躱けるのは基本だからね」

じゃあちゃんと明後日まで生きててね…フフツ」





「やっほ～社長生きてるっ？」  
「う…あ…きら…ら……」  
「ご主人様に社長の餌やり  
頼まれたんだけど…ゲホツ…！  
臭っ！この部屋臭すぎっ！  
ほんとにここで垂れ流しにしてたんだ  
社長…もうちょい我慢とか…  
っていつても2日も3日もは無理かぁ」  
「は…早く……お願い…  
もう…限界よ……」  
「それじゃそこに横になって  
仰向けにね」  
「うっ……何を…んんっ！」  
「よいしょっと…  
それじゃ口開けてー」  
「……？」  
……ま…まさか…  
きららやめっ………！」  
「んんっ…あっはぁあぁあっ！  
んっ…！んん……っ！」  
「嫌っ…あっ…ゲホツ！」  
「ちょっと何吐き出してんの～！  
ご主人さまがせっかくあたしの  
お尻に入れてくれた食事なのに…」  
「こ…こんなの食事じゃないわ…！」  
「まあ確かにね～  
これあたしが枕営業してきた先の  
おじさま達の精液に栄養剤とか  
混ぜたものだし  
美味しくはないかもね～  
でも用意してるのはこれだけだから  
食べずに飢え死にしても知らないよ？」

「そん…な……」  
「あたしだっておしりにこんなの  
入れて我慢してきたんだからさ  
ほらほらまだ出るよ～今度はちゃんと  
こぼさないようにね」  
「うぐっ…んっ……ちゆるっ…  
んぐ……！…ちゆるるっ…ごくっ…  
んっ…んふっ……ふうっ……」  
「アハハハハッ！本当に食べてる～  
あたしのケツ穴から出たザーメンを…  
ほんと必死なんだね社長～」  
「はぁっ…はぁっ…んちゆるっ…ちゅばっ…」  
「こぼしたのもちゃんとすすって食べなよ  
残さず食べたなら今度はもうちょっと早く  
餌持ってきてあげるからさ」  
「んぐっ…ゲホツ……くっ……！」

「はぁ…はぁ…うぐっ……はぁっ…」  
「そうそうこぼしたのも綺麗に舐めとって  
アハハっ！社長本当の犬みたい」  
「くっ……！んれるっ…んぢゆるるっ…  
んっ…ぐっ…！あ……んっ…！  
な…なに…？はぁん…っ！」  
「ん？ああ言っでなかつたっけ  
それ強力な媚薬もたっぷり入ってるから  
食べると全身が疼いてしょうがなくなっちゃうって」  
「な…くっ…ああああんっ…！  
はぁっ…あっ……！」  
「その状態じゃオマンコにさわれもしないね～」  
「こっ…こんな薬まで使って…  
私を犯すつもりなの……？んんっ…！」  
「犯す？いや別に？  
ご主人様はモデルの仕事で今いないし  
あたしも社長に餌あげにきただけだよ」  
「な……っ！う…嘘…」  
「…ンフフツ…なにその顔？  
社長期待してたんだ…  
その何もしてないのにグチョグチョの  
オマンコにご主人様のオチンポ  
突っ込んでもらえるんじゃないかって  
アハハハハハッ！」  
「……っ！！」  
「残念でした～  
ご主人様は社長のこと犯すつもり  
なんて全然ないのよ  
…どういうことかわかる？」  
「…そんな…くう……んっ！」  
「社長はこれからず～っと  
餌を食べるたびにそうやって  
悶え苦しんで  
それでも1人ここで耐えなきゃ  
いけないってわけ  
かわいそ～」  
「あ…あの子はいつ来るの…！」  
「ご主人様のこと？  
さあ…海外でいろいろ撮影するって  
言っでたし何週間か戻らないんじゃない？」  
「なんしゅ……う…そ……」  
「ご主人様が戻ってくるまで  
ヒトでいられるといいね社長  
じゃあたしも仕事だから  
あ、媚薬の効きもいいみたいだし  
餌は毎日持ってきてあげるね♡」  
「ちょっと…まっ…待って！  
こ…こんなの嫌ああああああ！」





「うっわ酷いニオイ…  
1ヶ月ぶりくらいかな？  
元気にしてた社長？」  
「ふうっ…ふうっ…んんっ！！  
んふううっ！おっ…男っ…！  
ううっ…うんぎぐっ…！ふうっ！  
男おっ…ぐっ…男おおおっ！」  
「ハハハッ！顔がちゃんと効いて…  
ちょっと効きすぎたかな？」  
「んふう…っ！ふうっ…！男…  
おっ…おねがiiiiっ…！  
犯してえ…私を犯してええええっ！  
なんでもするっ！  
ペットでもなんでもいいっ！  
きららもどうだっていい！  
事務所がどうだろうと知らないっ！  
だからあっ…おぐっ…！チンポっ！  
チンポで私のオマンコ犯してっ！  
セックスさせてええええっ！  
じゃないとっ…もう私っ…！  
狂う！狂っちゃうっ！  
ヒトじゃなくなるうううっ！  
はあっ…ああっ！ああああっ！！」  
「しょうがないなあ…ホラっ」  
「あはあああああっ♥  
あっ！ふごっ！んふううううっ！  
ほっ…おほおおおおおおっ！  
チンポっ！チンポ臭う！  
ほっ！おほっ！ほおおおっ！  
ちょうだいっ！  
これちょうだいっ！」  
「もう十分かな…きららお姉ちゃん  
例のアレやって」  
「はいご主人様♥さあ社長…  
あなたの今の『夢』を見せて…」




「チンポチンポチンポおおっ♡  
チンポが欲しいっ♡チンポに囲まれて♡  
セックスするだけの存在になりたいっ♡♡」

「...もう心の底から墮落しきったみたいだね」  
「フフツ♡まさか社長も自分の真の願望を  
覗き見されるなんて思っけてないよねえ  
ほんと軽蔑しちゃうな...  
ここまで女として墮ちきってるなんて  
社長のこと結構尊敬してたんだけど」  
「いやあ...夢の形を歪ませてそれを眺める  
ことができるなんてほんと最高だよきららお姉ちゃん  
特に社長みたいに今までの人生努力し続けてきて  
夢に手が届きそうになってる女の夢は最高だね」  
「ご主人様にこんな悦んで頂けるなんて  
プリキュアになって本当によかったあ♡」  
「それじゃ十分楽しませてもらったし  
社長の夢を叶えてあげるようかな...」



「それじゃ次の企画もきららちゃんと社長のオファー出しておきますからいやぁお二人なら別にこんなことしてもらわなくても喜んで出してもらうのにな…悪いねえ社長」  
「んぶふっ♡私が好きでやってることですから…んちゅぶっ♡ぶふっ♡これからも長いお付き合いに…んっ…♡なりますし…♡」  
「ハハハハッ！他のモデルの娘達もそのうち斡旋して頂けるんでしょう？」  
「ええもちろん…お望みであれば企画でもなんでも…んっ…あはぁっ♡例のお薬を使って従順にして提供させていただきますわ♡んちゅるるっ♡陵辱モノにリアルな演技が必要でしたら薬は使わないでそのまま…」  
「クククッ…ほんと社長も悪い人だ違法薬物でしょう？アレ」  
「ええ…でもその責任はすべてウチの事務所で取りますから♡」

「そうだ…私にもソレ注射して頂けます？」  
「ああ…構いませんよ増乳剤でしたかな…確かに以前より大きくハリもあるおっぱいになってますなあ」  
「ええ…私のような年増がこの業界で生きるためにはこういった努力も必要ですから♡」  
「このカラダなら所属モデルにも負けませんよ…いやむしろ私は小娘より社長みたいな女性の方がいいですなあ」  
「ありがとうございます♡今日もいっぱいご奉仕させて頂きますわ♡」




「はい並んで並んでー  
今日はあたしのデビューAV予約会  
インノーブル学園男子寮に  
集まってくれてありがと〜♥  
男子寮の寮長さんはあたしから  
説明して置いたからみんな今日は  
めいいうばいハメ外しちゃてね〜♥  
予約してくれたコはあたしがナマで  
手コキしてあげるからよろしくね♥  
で…肝心の予約券なんだけど  
そこに裸にいるおばさんに射精したら  
1枚もらえるからそれを持って  
こっちのカウンターにまで来てね  
そしたらあたしが手でシてあげる  
そこのおばさんはセックス中毒の  
肉便器だから好き勝手しちゃってね  
そのおばさんもAV女優だから  
キミの子種で妊娠したらそのまま  
ポテ腹モノとか出ちゃうかもね〜♥  
あ一言い忘れてたけど1人3枚までね  
3枚予約した人はあたしが3回シて  
あげるけどそのおばさんにも3回  
射精してあげてね♥  
じゃ〜みんな順番守って仲良く  
びゅっびゅっしてね〜♥」

「あっはあ…すごい…若い  
チンポがこんなに沢山…♥  
さあみんな来てえ〜ん♥」  
「よし…俺は2枚だから2回…  
おばさんおっぱい使うよ」  
「なんだよお前マンコ使わないの？  
じゃ俺もらい〜」  
「おい後ろ詰まってるんだから  
ケツ穴も使えよ！」  
「フフフツ…厳しい学園だけあって  
童貞丸出しの男子はっかりね  
どう？社長どんな気持ち？」  
「んふうっ…あああんっ♥  
いいいわぁっ♥普段相手にしてるおじさまの  
オチンポもいいけどお♥みんな思い思いにっ♥  
スコバコしてくれてっ…んああんっ♥  
若いチンピって最っ高おおっ♥」  
「あっそ…せいせいあたしに感謝してよねえ  
こんなにチンポ集まったのも  
あたしのおかげなんだしさ  
あと口の聞き方気をつけてよね  
あたしはご主人様の奴隷であんたは  
ただの便器なんだからさ」  
「はひっ！ありがとうございますゅうっ♥  
きららとご主人様のおかげで私は今最高に  
幸せですうっ♥」

「はいほらビュッビュっ♡  
次のAVも買ってねえ♡  
…まだこっちもやってるみたいね」  
「んぶふう〜っ…もっど…んぢゅろるるっ♡  
もっどチンポお…んふうっ…んふうううっ♡」  
「あれえ？手コキしてあげたコもいるじゃん  
こんな化け物みたいな改造おっばいのババアでも  
オールオツケーな女だと需要もあるみたいね  
それともノーブル男子は変態が多いのかな？  
どっちにしろ少し妬げちゃうなあ…  
…あれ？ご主人様から連絡きてた…」  
「んっ♡んほおおっ♡  
おっ♡おほっ♡おおっ♡♡」  
「はいみんな聞いて〜  
あたしからみんなにお願い♡」  
コレの飼主が  
もうこの便器いらなくて  
言うから代わりにこれの  
飼育を頼みたいの♡  
撮影のとき以外は好きに  
していいからさ〜  
…あ、オツケー？  
助かるわ〜♡  
じゃ社長また  
撮影のときに  
迎えに来るから  
その時までそのコ  
達と楽しんでて」





「やっほ～社長～  
撮影日だから迎えに来…うわぁ…っ  
ひっどい臭い…今日もまたお盛んなこと  
定期的にプレゼントしてた増乳剤も  
効きすぎじゃない？これ…  
乳首にチンポ入ってるじゃん  
これでまた仕事取れそうだね～  
お腹もしっかり大きくなってるし  
これなら今日の撮影もばっちりね  
…問いてる社長？」  
「あひへえっ…もっとお…もっと  
チンポおっ…あひっ♡ひひっ♡」  
「幸せそうな顔しちゃって…  
まあいつだか見た社長の夢のとおりになれてよかったね」



「こんなポーズでいいのお？  
元モデルとしてはなんかな〜」  
「んひゅーっ…ぶひゅっ…ぶひゅーっ…♡  
ちっ…ちんぽっ…まだぁ…？」  
「まーだよ、待てよ待て  
ほんと動物みたいになっちゃって…これなら  
まだパフの方がよっぽど聞き分けいいじゃん」  
「ほおーっ…♡待て…待つ…おひゅっ…♡」  
「すいませ〜ん！『コレ』もう限界みたいなんで  
はやめに本番お願いできます〜？  
っていうかニオイきつくて…ツーショットは  
もう勘弁してほしいなぁ」  
「んふひいっ♡ほんばんっ♡ほんばんっ♡  
ちんぽっ♡はやくちんぽっ♡おほっ♡おほほおっ♡」